

# 3

4年生は卒業か」「そうだな。そして我々3年生はいよいよ就職活動という、世間の荒波に採まれる時期だ。就職活動では何が一番大事だと思う?」「自己分析とか企業研究とか……」

「まあそうだな、しかし一番大切なのはモチベーションの維持だと思うのだよBくん。」

例えば、会社説明会に行つて隣の人とコミュニケーションをとろうとして話しかける。

『大学はどちらですか?』、そ

して答えが返ってくる。

『早稲田大学です』と。思わずテ

ンション急降下だよ  
「バカだな〜A、早慶がナンボのモンジャという気持ちでいないと!」「そういう君は何かないのか?」「そんな面白い話でもないけど……リクナビ(就職サイト)で、ある銀行の会社説明会を予約したんだ」「ふんふん」

「僕が予約した時、他の日程は全て満席である一日しか空いてなくて、

速攻で予約を入れたんだよ」「なるほど、セーフだったんじゃないか」「ところがだ。

当日会場に行くと、周りは女学生……女性しかいない。思わず隣の女に『あの、今日つて何の説明会ですか?』とバカなことを聞いたよ」「それ?」「『××銀行の一般職の説明会です』とその人は答えた。

空いていた日程は一般職の説明会だったとやっと気がついたよ。ふと

## 就職戦線 異常だらけ

### フセマにへこみ 説明会男一匹

見ると、前の方にもう一人男がいて目が合った。僕らは目で会話したよ。

あんたも総合職と間違えたんですね、お同志よ!と。そんなわけでその説明会、一応最後までいたんだが、男女比おそらく98:2。いやあ化粧くさい空間だったよ

それ、あり得ないくらい面白い話だよと、笑いかみ殺すA君でありました。彼らの輝ける明日はどっちだ!? (猫)

# 東

夏休みに実家に帰ったK

は母に言ったそうだ。愛媛県出身で現在一人暮らしをしているのである。とにかく東京の大学に行きたかった。行動範囲や人脈を広げて、ついでに素敵な出会いも……と思いを巡らせた。両親も、すんなり許してくれた。

待ちに待った入学式。当日は、真冬の雨のような天気だった。式典や説明会で、終わったのは夕方五時すぎ。友達作りといつても、隣の子と挨拶したてい

## 愛媛のマドソナの

### ユウウツよきようなら

どだったからなんとなく不安、愛媛から上京していった母もその日に戻ってしまった。

六畳の寒い部屋には、寝具のマットレスと数個のダンボール、そして自分だけ。とりあえず「腹が減っては」と夕飯の準備にとりかかったが、お米のところまで手が止まった。何合

がいいか、一人つてどれくらいかわからない。  
「1・5合炊いたんよ。そしたら特大おにぎりが3つも余計にできちゃって、2、3日はそれをほおばった」そうだ。

ダンボールを逆さにしたちやぶ台で、たいていは「ご飯とほか一品」のさびしい食事をとりながら頭に浮かぶのは、味にうるさい父、いつも歌っている明るい母、心やさしい兄にぎやかな飼ひ猫。ふるさとエヒメの一家団らん。

夜ごと聞こえる、アパート下の飲み屋の新歓騒ぎも、本当にイヤだった、という。

授業が始まると、クラスやサークルで友達は増えたし、中国語だつて大変だけどおもしろい。しかし、夜の寂しさは積もり積もっていった。ピークの7月は夏休みを心

待ちにする毎日。そんなKが……。「不思議なんだけど、愛媛に帰省して、逆にこれからも東京でやっていけそうだって思ったんよ。私にはこうやって帰る場所があるんやっ

て」  
夏前のユウウツよきようなら、みたいない明るい顔で後期のキャンパスに還ってきた。

『坊ちゃん』のどこからきたマドソナは、いまや一人暮らしをエンジョイしているらしい、ぞなもし。里心も癒えて、4月から先輩顔の文学部2年生。(香)



吐

息真つ白の冬の早朝、朝日を浴びながら、ゆき(仮名)ら3人を乗せた気球は上空へ上っていった。

その日は風もなく空も澄んでまさに気球日和だった。気球が地面から離れる時、彼女は離陸したことに全く気づかなかった。3人がやっとの大きさのバスケットに乗りこみ、パイロットがバーナーを操作して炎を炊き込むのを見ていたらいつの間にか地面から離れていた。エレベーターよりもっとゆったり。「もっと下見ればよかった」。ゆきは惜しい気がした。

好奇心旺盛な彼女が「気球乗らない?」と誘われて断るはずはなかった。友達が中大気球サークル「LARK」に所属しており、パイロットの免許を持っていたのだ。

前夜6時に宇都宮線古川駅に集合し、ゆきはさっそくメンバーに挨拶した。中大生だけかと思いきや、社会人、東京薬科大生、佐賀大OBとさまざまな顔ぶれがそろった。その日はみんな温泉に入り、夕飯の豆乳鍋を作って食べた。「朝早いから早く寝るのかな?」と思っていたの

だが眠る気配は一向にない。コタツを囲んで食って、飲んで、しゃべって……これが“気球人”の流儀らしい。寝についたのは1時をまわっていた。

なのに朝はやけに早かった。5時に起きて身支度を整え、バンに乗り込むとちやうど日の出の時間だった。渡良瀬に着きさっそく乗る準備を始める。すでに他の団体も乗る準備をしていて、「今日は飛べそうだね」と気球人の朝の交流風景。

——3人が乗りこんだ気球はいつの間にか上昇し、高度1000メートル。ゆきは高いところにいるという緊張感を味わいつつも、景色を楽しんでいた。

### 快感とテツガクのヒヤリ

「始めはよかったです。民家はミニチュア版のように見えてかわいかったし、眺めはいいし。ところが……」

確かに気球日和だったが、パイロットがいうには「風がなすすぎ」。気球に乗って20分もたったころ、気球はパワーライン上で動かなくなりました。パワーラインとは強度



の電流が流れる電熱線のこと。「あそこに気球が落ちたら感電死してしまわう」。パイロットの言

葉に、ゆきは緊張したものである。バーナーを焚いたり消したりして、気球を上昇させても風の流れるはない。はや1本目のガスを使いきり、2本目のガスとバーナーをパイプでつなごうとしたが……何故かつかない、ダブル・アクシデント。無線で下界と連絡をとりつつ、最後は他大LARKのまりちゃん(仮名)が、「エ

イツ」と怪力っぷりを發揮して、なんとか装着

しかし気球はなおもパワーライン上空にある。

パイロットが穏やかな風をつかんだ。「ここで着陸しておかないと」と一気に急降下。3人の乗った気球が無事着陸したのは30分後だった。バスケットが3度もはねる衝撃は相当のものではあったけれども。

「私は都会生まれ都会育ち。寒いのも苦手だし自然を相手にすることは全く慣れていなかった。でも気球に乗れてよかったです。今回アクシ

デントということもあって、いやおうなしに『死』を意識した。『死』意識すると、こんどは『生』を実感する。普段はそんなことを意識しないぐらい人工的に作られた安全な空間にいてることがわかりました」

口調もテツガク的なゆきである。同時にネ、と言った。「もう一つ心に残ったことがあって、それは気球人(これもゆきがつけた呼び方)同士が織りなす人間模様。年齢も個性もばらばらだけど、ただ気球が好きという一つの共通点で毎週集まってきて、そういうのがよかった。そこで恋愛あり、しごらみあり。話聞いてておもしろかった」

(落)



学部・A子の母親の実家は、T県のある田舎。のどかな里が、いま大変なのである。

事件の起こりは3年前、A子が高校生になったばかりの頃だった。朝、祖母がいつものように畑に行く

と、なんとイモが全て抜かれていたのだ。おまけに、その荒らされた

ようが並じやない。声を失って、彼女はあわてて息子たちを呼びに

いった。みなで畑に行ってみると、ありと動物の足跡が……。田舎に住

む人ならもう間違えようがない。

イノシシのシワ

「はあー。ついにやられたか」とみな天を仰いだ。

じつは数カ月前、一山超えた隣の町で「イノシシが出た」という噂が

あった。「そのうちこつちにもやってくるだろうな」と言っていた矢先の出来事である。

一番悔しかったのはA子だったよ

うでもある。小学生の卒業文集で「好きな食べ物は何？」との質問に、迷

わず「トマト、ジャガイモ」と書いたほど、ジャガイモ大好き。いまだ

珍しく素朴な女の子である。イノシシがニクイ、私の好物、どうして

れるのよ、と。

祖母は一計を案じ、翌週、親戚一同総出で、畑にぐるりと有刺鉄線を張り巡らせた。これで一件落着！

はならなかった。甘かった。今度は田んぼがやられたのだ。畑ならまだしも、主食のお米を狙うとは！

結果、去年の秋の収穫はたったの2俵。イノシシは5、6頭の家族の群れ

をなして行動する。夜行性である。ある晩、飼犬が物凄く吠えるので

祖母は窓の外を覗いてみると、イノシシの親子が

わがもの顔で……。見よう

によつてはかわいくもあるのだけれど。隣町では、手作り特製のオリで

5頭を仕留めたいらしい。が、一家の母は健在。

「まったくどうしようもねえ。Uさんとこは今年から米作るのよしたつてさ」「そうかい。うちは今年2表

きりしか獲れねんよ。母親を捕まえなきゃダメだいな」

被害はやまず、正月帰省した折もこんなイノシシ談義。つ

たくも、と純なA子も

ついでに口調になって悔しがるばかり。(花)

カ ッカッカッ……。今春卒業の4年生、H君は緊張した面持ちで歩いていた。目的地は彼の実家

なぜ緊張して歩く必要があるのか？それは、昨日のこと。

「俺、盆も正月も卒論やバイトやらで、全然帰省しなかったんだよ

な」「おい、それヤバイぜ。俺も久しぶりに帰ったら、妹に部屋をと

られて、居間で寝泊りだよ」「俺の部屋は俺の物が撤去されて植木置

き場になってた」

……などの話を聞いて、ろくに電話もし

なかったことを悔やみつつ、自分の部屋や物の無

事を祈りながら家路を急いでいたのだった。

そして懐かしいわが家の門が見えた。「ただいま……」と一歩入るなり、

ワンワン！と犬の吠える声。「犬!」「おう、お帰り」「お……おやじ、こ

の犬は?」「ああ、去年うちの一員になったジュ

リーだ」「ジュリー!?」「母さんは沢田研二が好きだ

からな」「そうじゃなくて……」

まあ、犬くらいならいいかと、H君は変わらない自分の部屋で安堵感にひたっていた。すると「H、ちよつと来い」と父の呼ぶ声。

とりあえず居間に行くと、父母二人そろって沈痛な面持ちで正座していた。「なに?どうしたの」とH君が座るなり、「H、お前いくらいるんだ」と父がきりだした。「……はア?」

「お前、おととい電話かけてきた

だろ?『俺だ、ちよつと事

故つちやつてお金があるんだよ

ね』って。どうしようかと思つたら、いきなり帰ってくるって言うし。かなりオオゴトなのか?」

びつくりしたのはH君。「おやじ、それは、オレオレ詐欺だよ。ニュー

ス見ろよ!」

オレオレ詐欺の説明をしつつ、これからはママに連絡しよう……いろいろな意味で心配だから、と思うH君でしたとさ。

(兎)



職に就くのは難しい。バイトだって難しい、のである。

「何かいいことあったの？」  
「なんだかTはご機嫌。」

「実は今日、バイトの面接なんだ」  
Tは経理研に通っている。家から学校まで往復3時間、帰宅は夜9時過ぎになる。それやこれやで、なかなかバイトができない。この1年、バイト探しの明け暮れだったのである。

最初に受けたのは、ある着物展示会での案内の仕事だった。だが、面接も兼ねた説明会へ行くと、仕事の案内は案内だけで、展示会には行かなかった。知り合いを展示会によび、そこで品物を買ってもらえれば、自分の給料が上がる歩合給、という話を聞かされた。「なんだか怪しい匂いがあったので」Tは辞退した。

次に受けたのは、夏期講習の塾講師のアルバイトである。筆記テストと面接を受けた。前回の時とは違い、1対1の面接で、自分の将来の希望なども聞かれて緊張したワ、という。「夏期講習の後も続けられますか？」  
と聞かれたので

「夏休みの間しかできない」と思います」  
とTは正直に答えた。

そのどこが悪かったのだろうか。

「採用ならば、明日電話で連絡します」と言われ、面接は終了した。次の日、電話は来なかった。

さらにTは某テーマパークのスタッフにも応募、某レンタルショップも電話するなり、週にどのくらい働けるの？と聞かれて、商談ならず。今度は——飲食店のアルバイトに応募したのだという。電話をした時点で「ダメ」と言われること

### バイトも大変 電話は来なかった

も多かったせい、面接をしてもらえること自体がうれしい。その日Tがご機嫌だったわけである。

「よかったじゃん、がんばってね」と私はTを見送った。

次の日、「面接どうだった？」とせつつ私に、Tは報告した。「だめだった……」……(あちゃー、聞かない方がよかった)としてTは悔しそうに言った。「はあー、なんで1日は24時間で、私の体は1つしかないんだらう」  
ファイイト！



3 万人もの学生がいるんだから、再会もあるわよ、と見るか、そんな大勢のなかでよく再会できたわね、と偶然をことほぐか。私、ことほぎたい。

中学を出ていらい、4年ぶりに出会った。モノレールの駅で、Mちゃんと。4月、キャンパスではまだ教科書を買うために長い列ができていた。いつものようにモノレールのホームに立っていると、見覚えのある顔が私の方に向かってきた。もしかしして……？

### 奇跡の…… 持つべきものは旧友

バックを持つ手先、彼女はすうーっと通り過ぎてしまった。

モノレールの中でも、なんて声を掛けようか、とずっと考えていた。小・中と仲良かったが高校時代はほとんど連絡もしていなかったから、そろりと顔をあげて見回すと、新聞を広げたおじさん、ヘッドフォンの夢中の学生、多摩動帰りの母子、そしてM。ただでさえ乗客の少ない昼間の車内で、もう彼女しか目に入らなかつた。

しばらくして、Mは携帯を見ながら、

前髪をさらっと整えた。前髪を何気なく気にする仕草は今でも健在だった。そういえばそうだったな、と立川南駅に着く頃には、ひとり思いだし笑い。

「えっ、Bちゃん！ どんから現れたの……つて、もしかして中大!？」  
ここにこして見せた私の定期券を見てMは目を丸くした。

「Bちゃん文学部なんだ。私は法学部」

それから2、3時間はおしゃべりノン・ストップ。気分は

中学生のままだ。「大学でいくら仲良い友達がたくさんできて、やっぱり旧友よね、Bが落ちて着くんだよ」

Mの一言にはつとずる。私もそうだから。自分の良い面も悪い面もわかってくれる友達は、そう簡単には出来ないものだ実感する。

新しい出会いとは一味違うけれど、素敵な出会いができた一日だった。ともに中大を選んだゆえにあり得た、この偶然の女神に感謝したい気分。

(韓)